第７回NHK杯全国高校放送コンテスト愛知県大会

ドラマ部門　講評

このたびは力作をご応募いただき、ありがとうございました。高校生の皆さんが独自の感性で切り取った作品、どれも大変興味深かったです。評価に際しては「話の展開の自然さ」「はっとさせられる視点」「伝えたいメッセージが明確か」などを重視したつもりです。

ラジオドラマ部門は、映像に縛られない自由度の高さを生かしたラジオならではの作品が多くありました。SF的な展開や非日常のシーン、さらには長い年月の経過を描いたものもあり、皆さんの発想力や想像力に驚かされました。

テレビドラマ部門は、どうしても撮影が可能な場所という制約があるためか、日常生活を舞台に展開する作品が多かったように思いますが、そうした中でも合成画面やイラストを挿入したりと、様々な工夫が見られ、楽しく拝見することができました。

両部門共通して多く表現されていた学校生活のシーンは、皆さんが現役の高校生であるからこそ、演技の自然さが際立っていると感じる作品も多かったです。リアリティーというのはこういうことかと感じました。また時事ネタや近年ならではのモチーフも登場し、令和の高校生の日常を垣間見ることができたようにも思います。

様々な手法を用いて皆さんが伝えるテーマは、共通するものも多かったです。何らかの理由で「学校になじめない」「近しい人に心を開けない」という登場人物が、友人や家族との関係性、コミュニケーション、そして思いやりの大切さに気付いていく。あるいは「自分に自信が持てない」主人公が、ありのままの自分を認められるように変化していく。そうした物語が多かったように感じました。それらは即ち皆さんが日々の学校生活の中で感じていることなのだとすると、今も昔も、若者が抱える悩みは根底のところでは変わらないのかもしれない、と思いました。（一方で、より斬新で大人世代の想像もつかないような問題提起的な作品をもっと観てみたい、と思うところもありました。）

こうした普遍的な悩みと作品作りを通じて向き合い、自分なりの答えを導き出し、それを万人に伝わるよう表現するという過程は、とても貴重だと思います。この過程を通じて、自分自身を見つめ直し、また他者のことを想像し、成長することができると考えるからです。

これからも、皆さん自身が日常の中で持つ悩みや怒り、違和感などを大切に日々を過ごし、できればその感性を元に新たな作品を作ってみていただければと思います。将来どんな道に進むかに関わらず、その経験がご自身を支えてくれると信じています。

２０２２年６月２２日

NHK名古屋コンテンツセンター

徳田周子